

## 18. 西山卯三による観光計画論に関する研究

-1930年代から1960年代までを対象として

Study on the tourism planning theory by Uzo Nishiyama

- Focus on Uzo Nishiyama's works between the 1930s and the 1960s-

西川 亮\*・中島 直人\*\*・中林 浩\*\*\*・西村 幸夫\*\*  
Ryo Nishikawa\*, Naoto Nakajima\*\*, Hiroshi Nakabayashi\*\*\* and Yukio Nishimura\*\*

This study focuses on the tourism planning theory and practice by Uzo Nishiyama between the 1930s and the 1960s. Uzo Nishiyama, who is famous for the housing theory, had an interest in the field of recreation since before WW2. After WW2, conditions of houses in Japan were very poor and he had an idea that people could not rest at home and the recreation spaces were more important. He also had an interest in tourism as one type of recreations.

In the war-damage reconstruction period, his interest in tourism was focused on facilities from an architect's viewpoint. In around 1959, his interest in tourism changed to "national land planning of tourism". His lab planned several tourism plans including the "Image planning", which was famous as his planning theory. In this research three image planings are analyzed from the perspective of tourism planning and it clarified that these planings were partly developed based on his tourism planning theory.

*Keywords: Uzo Nishiyama, Tourism, Image Planning, A Plan for Kyoto, Recreation, National Land Planning*

西山卯三, 観光, 構想計画, 京都計画, レクリエーション, 国土計画

### 1 はじめに

#### 1.1 背景と本研究の意義及び目的

バブル期までになされた観光開発の爪痕は未だに我が国の観光地を空間的に質の低いものとする要因となっている。観光開発の歴史を振り返ると、大規模開発がなされるようになったのはおよそ1960年代頃からである。高度経済成長や都市と地方の格差是正、地方都市の発展を名目に各地で観光地開発が展開した。いわば観光＝消費活動と捉えられ、民間資本による観光開発が急激に進み、空間的なコントロールが十分に機能しなかった時代である。

鈴木忠義は当時、こうした消費目的の観光開発に一辺倒となる背景の1つに「開発理論や、手法の開発がきわめて未解決（略）この問題に専心しうる大学、研究機関が極めて少数<sup>1)</sup>」だと指摘していたが、その数少ない研究機関の1つに西山卯三（以下、西山、1911-1994）が主宰する研究室があったことは、活動や発言を見る限り疑いのない事実であろう。尾家が「わが国における観光研究が、端緒をついたばかりの1960年代、観光研究分野へ寄与したのは（略）西山卯三<sup>2)</sup>」「観光開発論の先駆者<sup>2)</sup>」と評価している通り、西山は1960年代に先駆的に観光開発の問題を捉え、実際に計画を立案して世に問おうとしていた。西山研究室の観光を専門とする系譜は三村浩史<sup>1)</sup>（京大名誉教授。以下、三村と書く）、西山徳明（北大観光学高等センター教授）と繋がり、日本の観光研究を牽引している。これらのことを踏まえると、その源流である西山の観光地に関する計画論を明らかにしておくことは重要であると考えられる。

西山の功績に関する研究は門下生や関係者を中心になされてきた。住宅研究や構想計画論は注目されてきた<sup>2)</sup>ものの、観光については必ずしも多くなかった。しかし、近年出版された「西山卯三の住宅・都市論」の中では観光につ

いて言及されている。中林は西山がレクリエーション空間や観光地に対するひとかたならぬ関心を示しており、観光地や観光開発に関する発言も多かったことや、レクリエーションが国土と地域の健全な発展の根幹にすわると捉えており、レクリエーションの中で週・季節単位の広域社会圏で実施されるものが観光だと捉えていたことを指摘する。しかしその記述は西山の観光に対する意識の理解に留まり、計画者としての西山の像は十分に考察されていない。また、本論文で明らかにするように西山の観光に対する姿勢は終戦直後と高度経済成長期で異なる。そこで、本研究では次の3点を明らかにすることを目的とする。①西山の観光計画論を西山の意識の変化と共に詳細に捉えること、②計画者としての立場から見た西山の観光計画論を明らかにすること、③西山の関わった計画を通じて理論と計画の関係性を見ることである。そしてそこから明らかになる西山の観光計画論の特徴を現代との対比から論じる。

なお、研究の対象とする期間は1930年代から構想計画までである。西山の観光に対する関心は1960年代の構想計画で到達点に達したと考えられるからである<sup>3)</sup>。

#### 1.2 研究方法および研究史料

NPO 法人西山記念文庫には西山の遺した自筆メモや著作、西山研究室で立案した計画書等が保管されている。西山の自筆メモは貴重な一次資料であり、文献3)に掲載のNPO 法人西山卯三記念すまい・まちづくり文庫所蔵の重要資料ボックスリストのうちボックス主表題に「観光」という語が含まれたもの全てと京都計画・奈良計画に関する資料を閲覧した（計12ボックス）。自筆メモには、発表されなかった論考や外部との打ち合わせ結果などが記されており、西山の思考をより深く理解できる。これらの収集・分析と三村へのヒアリング<sup>4)</sup>を行った。西山の著作は文献3)

\* 正会員 公益財団法人日本交通公社(The Japan Travel Bureau Foundation)/ 東京大学大学院都市工学専攻(The University of Tokyo)

\*\* 正会員 東京大学大学院都市工学専攻(The University of Tokyo)

\*\*\* 正会員 神戸松蔭女子学院大学(Kobe Shoin Women's University)

にリスト化されているが、本研究ではリストに掲載されていない文献も収集した<sup>6)</sup>。

なお、本研究は西山卯三が明らかに関わった業績のみから論理を構築しており、西山卯三研究室に所属していた門下生のみによる成果については研究対象から外している<sup>6)</sup>。引用以外の年号を西暦下2桁表記とし、(‘XX)で記す。

## 2 戦前～戦災復興期の西山と観光

### 2.1 戦前の西山と観光

西山は’42年に日本建築学会が開催した、「大東亜建設」の理想を表現し記念するような造営物のデザインコンペに応募した。「祝大東亜聖地祝祭都市計画案書<sup>4)</sup>」では西山は大東亜聖地の建設にあたっては、聖地訪問が国民の「国家民族の一員であることを自覚する」ための旅行の目的地であるべきという考えのもとで飛鳥を対象にした計画案を提示した。計画では飛鳥の地割を取って壊し、軸線を強調した上で象徴的な施設が配置されるものだった。しかし後年になって西山自身でこの計画について反省している<sup>5)</sup>ように、当時のナショナリズムの影響があったと考えられる。

三村へのヒアリングによると、西山は戦前から観光に対する関心を持っており、その背景にはコルビュジエの影響があったのではないかと述べる。コルビュジエは「輝く都市(’31 CIAMにて発表)」の中で住居や仕事と共に休息空間の重要性を指摘していたが、西山はそこから余暇に関心を抱いたと言う。

### 2.2 戦災復興期の西山と観光

戦後、西山は戦前から研究していた住宅の復興が戦災復興期の重要な課題と考える一方、経済的な貧困という社会的背景から即座に住宅で休養できるとは考えられないため、レクリエーション空間も重要だと意識し、レクリエーションから観光を意識し、観光施設開発やデザインを戦災復興期の重要な仕事のひとつと捉えていた<sup>6)</sup>、と’68年に振り返っている。つまり、当時、国全体が外貨獲得という目的で観光に関心を高めている時代であったが、西山は国民の生活という観点から関心を持ちはじめたということである。確かにコルビュジエの休息・娯楽の捉え方と同じである。

当時の記述を見ると、西山は「長い間、灰色の軍需工場にたちむかっていた建築家にとって、ホテルやカジノのきらびやかな造形は何か華やかなよろこびを感じさせる<sup>7)</sup>」と述べている。戦時中に宇治火薬製造所の製造工場の設計を手がけていたことを踏まえると、西山自身も観光に対してそのような期待や意識もあったのではないかと。西山は建築家・造園家・工芸家から構成され’46/8に設立された観光技術家協会に建築家として設立当初から関わっており、近畿支部で精力的な活動を展開し、’47/6には大丸百貨店で「近畿観光施設展覧会」を手がけている<sup>7)</sup>。

また、西山は’46/8には「琵琶湖国立公園総合施設計画案」と「京都観光計画」、’48/1には「奈良観光計画」の構想をメモや図面に遺している<sup>8)</sup>。「京都観光計画」は旅館地域や文化地域などの地域性の構想が伺えた。「琵琶湖国立公園総

合施設計画案」や「奈良観光計画」は様々な観光施設を列挙しており、「奈良観光計画」では後年になって批判の対象とする三笠山山頂へのホテルといった記述も確認できる。これらの計画を検討した経緯は定かではないが、奈良観光計画については’47から’48にかけて複数回、奈良市観光課長等との打ち合わせも行っていった記録がある。戦後間もない頃の西山は戦前から続けていた住宅研究に精力的に取り組んでいたが、こうした事実は、西山が観光にも当時既に強い関心を示していたことを表す。

### 2.3 西山の建築家としての観光論

当時西山は建築家としての観光に対する関わり方や観光そのものの考え方も提示している。’53/8に記されたメモ「景観と観光施設(’53/8/22)」によると、西山は景観を作るものが「人工と自然」であり、それを活かすものが観光施設だと捉えていた。また、観光施設は、「建築家は(略)様々な施設がお互い独自に孤立的に或は対立的に無益につくられることを防ぐ(略)様々な施設が観光ルートという空間的・時間的配列の体系の中で総合され補完しあい互に効果を高めあう様な形でつくられてゆくべき」とし、都市計画と観光客の動態を組み込んだ空間創造に建築家が取り組むべきだ、と主張する。当時、観光施設不足が叫ばれ、その不足解消が観光事業だと捉えられていた状況で既に西山はこのような考えを持っていたことは特筆すべきであろう。

また、外国人のみを相手に考えることの問題を次の2つの観点から主張する。第1に保存から派生する誤った価値観の創出である。外国人相手に日本の文化資源(西山は「大昔の人のつくったもの」と表現する)や自然資源の珍しさを売ることは、今あるものを見せることとなり、観光資源の現状保存を進め、戦後の国土開発を妨げ得る。また保存だけでなく、観光資源に似せた建築様式を是とする考えが生まれる懸念を示していた<sup>9)</sup>。この指摘は、外国人のみを観光のターゲットにすることの危険性を述べると共に、文化資源や自然資源の保護に対する批判的意見とも読み取ることができる。そして第2に、観光施設の整備は外国人のみを対象とするにはその規模の問題から限界があり、むしろ国民の観光を視野に入れるべきだということである。そのため、国内の人口配置や都市配置を踏まえた開発整備をするべきだと主張する。ここに後に繋がる国土計画との接点や国民の観光という視点を見出すことができるが、当時は観光施設の経営的観点からの着目であったことに注意したい。当時、観光の専門組織である全日本観光連盟が外貨獲得のための観光に意気込んでいた<sup>10)</sup>のに対し、西山の冷静な分析は興味深い。

### 2.4 戦災復興期の西山の観光計画論(’53)

戦災復興期の西山の観光計画論を整理すると表1の通りである<sup>8)</sup>。観光地全体の計画から施設の外観、間取りに至るまで言及されている。宿泊施設については冷暖房の完備や和室への椅子の設置など、住宅調査に基づいた知見に対比させて宿泊施設を捉えた提案が見られる。また、観光資源である自然や文化財については、施設を通じてより良い

表1 西山の観光計画論(53)

全体的な考え方	<ul style="list-style-type: none"> <li>観光は人が動き回るものであるから、そのルートに沿って施設を配置し、ところどころに休憩するための広場や木陰、案内所を整備するという全体の計画を策定する。</li> <li>人を運ぶ輸送機関を十分に用意する</li> <li>陳列館等の観光施設については、観光客のうち何パーセントが入りどきの密度で施設の中を歩くのかを考慮し、観光客が集中して雰囲気を楽しむことを選択する</li> <li>施設には動的なものや静的なものがあり、前者は交通の便の良い場所に配置し、静的な施設は特にそういう雰囲気を楽しむたい人だけが利用できるようにする</li> <li>交通は表通りと裏通りを用意し、表通りは大量の観光交通をさばくようにし、裏通りにゆっくりとした雰囲気を味わえるようにする</li> </ul>
個別施設の考え方	<ul style="list-style-type: none"> <li>施設全般                     <ul style="list-style-type: none"> <li>近代建築の考えに合わせた用途に合わせた機能主義的な「美しさ」に加え、その土地の趣向に合わせた形態とする</li> </ul> </li> <li>交通施設                     <ul style="list-style-type: none"> <li>観光地の第一印象、最終印象に残るエリアの景観に配慮</li> </ul> </li> <li>駅                     <ul style="list-style-type: none"> <li>過去の蓄形ヒントに頼ってそこにあるものを借りて形を作るよりも現在の建築設計、技術の水準を表すような機能的な建築であることが望ましい(「奈良にふさわしい」つもりで奈良の歴史性に無関係な屋根がつけられた駅舎を例示)</li> </ul> </li> <li>観光施設                     <ul style="list-style-type: none"> <li>人々にその地域の良さを分らせるような施設を作る</li> <li>天然資源を観光対象とする場合、それに接近できるような施設を作る(海の中に入っていく海底チューブ等)</li> <li>博物館や水族館、陳列館は人を惹きつける形に変え、それ自身を観光資源とする</li> </ul> </li> <li>展望台                     <ul style="list-style-type: none"> <li>見下ろすところであると同時に見上げる対象物で地域のシンボルになる可能性があるため適切な配慮が必要</li> </ul> </li> <li>宿泊施設                     <ul style="list-style-type: none"> <li>衛生的であること・娯楽に使う動線までできるだけ短くする。また、客とサービスの動線を交差させない。・災害に備えた防火設備や非常口の明示・冷暖房の完備・部屋の簡素化・部屋の独立性・住宅様式に合わせて椅子を置く・各部屋にシャワーを設備する・台所は調理・配膳・洗浄・収納場所を明確に分ける必要がある</li> </ul> </li> <li>標識・目印                     <ul style="list-style-type: none"> <li>ある観光地で統一したものをつくりそれを全国に広めていく</li> </ul> </li> <li>広告物                     <ul style="list-style-type: none"> <li>全ての広告物が悪い訳ではなく、建築物に広告物を付ける場合、それを想定して設計する必要がある</li> </ul> </li> <li>観光地の美しさ向上に向けた考え方                     <ul style="list-style-type: none"> <li>都会的なものに置ける細土色を壊すべきではない</li> <li>その土地特有の細土の美しさを強調してあらゆる施設の造形を考へるべき</li> <li>観光施設をその土地固有の美しさに敏感な感覚を働かせてその美しさを育てるために造型する。そして特徴ある美しさを創り出す。それによりその土地の景観を更に良いものとし、観光地として立派なものにしていく</li> </ul> </li> </ul>

ものにしていくという施設中心の考え方がなされている。

確かに三村の見解や西山自身の振り返りの記述から、戦前から西山は「国民の生活という観点に立った観光の捉え方」を持っていたのだろうが、戦災復興期の論考を振り返る限り、その視点は強調されていない。前述の奈良観光計画からも伺えるように、西山の初期の観光計画論は観光施設を建設することによって観光地を整備しようとする建築家としての発想に基づく思考だったと言える。

### 3 国土計画としての観光計画論への発展(59)

西山自身がまとめたと言われる「西山個人の研究の流れに関するメモ」によると、「{1959年頃から}再び国土計画・レクリエーション計画等への注目」と記載されている<sup>9)</sup>。ここでは59年から発表された論文を詳細に精査し、西山の観光計画論の構築過程を追う。その前に西山にとっての59年を振り返ると、西山は59年1月に京都市長に対し将来マスタープラン構築の要望書を送っている<sup>(11)</sup>。その理由を「今後、国土の構造、国民の生活様式の急激な転回をみせるであろう」為としていた。西山は社会全体、国全体で始めようとしている大きな変革の波を読み取って59年頃から国土計画に注目するようになったと推察される。

59年に三村と連名で「国内観光客層の構造と流動<sup>10)</sup>」を発表した(以下、59論文と書く)。この論文は、「観光需要を生み出す観光客層の構造を年齢、性別、従事産業等による分析を行うとともに、全国的な流動の一端を明らかに」することが目的であった。この研究は建築学会の論文で初めてタイトルに「観光」という語が登場したものであるが、建築学会の論文の中で建築や物理的空間を扱わないこの研究は一見すると特異なものである。論文では、「観光需要-観光客と観光供給-観光地の適正な均衡を得るための

国土計画が必要(略)本稿はこのための基礎的な研究」と記述している。つまり、どういう観光需要がどこで誰によって発生するかを見極め、国土計画を検討しようとしていた。53の論考でも国民の観光需要を踏まえた計画の必要性を論じていたが、ここで具体的な研究へと深化した。

「レクリエーションのための国土計画<sup>(11)</sup>(60)(以下60論文と書く)」は前半でレクリエーション論を論じ、後半で59論文の成果を引用して観光のマス化を見据えた計画論を論じている。具体的には、(a)観光基地におけるマス化に伴う大量輸送交通機関の整備や交通網の再編成、(b)観光地点におけるマスの流れと滞留時間を考慮した観光地における移動のための動線と施設整備、(c)マス対応の一方で少数向けのスペシャル・レクリエーションの確立、(d)「見る」「聞く」という受動的レクリエーションから「する」レクリエーションへの変化によって生じる低開発地域利用の需要とそれを実現するための空間の効率的利用、(e)マス観光に合わせた施設が集積したレクリエーション地域、それを包括する地方的観光圏、それらを結ぶ広域観光ルート、広域ルートの結節点における全国的な観光基地という地域レベルから国レベルまでの段階的・面的整備である。なお、(b)について、マス化に伴い、あれもこれも見てきた、という「つまみ見」観光が発生することに対して西山は必ずしも最善ではないが必然的なものとして受け入れ、そういう需要層が味気ない観光をしないよう綿密な小ルートの構築と全体計画が必要だと述べる。また、西山は資本家にとっても無謀な開発は無利益であり、資本家に対してさけるべき限界点を示すのもプランナーの役割だと論じている。60論文は初めて西山の「国民の生活という観点に立った観光の捉え方」が強調された論文であった。その後は一貫してこの考え方が強調される。

「国土計画と観光開発<sup>(12)</sup>(61)」では、交通輸送整備やマスへの対応、特殊観光需要への対応など、60論文と同じ指摘がなされている。その上で、大都市及び近郊地区以外のレクリエーション地域の型として、自然景観と環境を主体とするもののうち①自然景観の保持に重点をおくもの、②利用を目的とするもの、③スポーツ等で利用するもの、④温泉地、⑤文化財・観光地、⑥産業・生活観光地があるとし、それぞれについて表2のような整備の必要性を指摘する。特に「文化財・観光地」については具体的な整備の考えが示されている。開発と保全の考え方については、何も手を加えない保護よりも明確な見通しを持った積極的な開発の方がはるかに保護の役割を示すと述べている。

表2 西山の考える観光地タイプ別の整備の考え方<sup>(12)</sup>

型	整備の考え方
①自然景観の保持に重点を置くもの	厳然として保護する(第一級の景勝地) 地理的・景観的な隣接地も段階的に保護
②利用を目的とするもの	需要予測の上になつて十分にエリアを確保する
③スポーツ等で利用するもの	(特に言及なし)
④温泉地	それぞれの土地と施設に風格をつけ、特色を持たせる
⑤文化財・観光地	重要度に従う等級分け、その組み合わせによるルート設定、それに対応する周辺地帯の整備、さらに重要度が高く、需要の多いものは特等観光施設で代替させる
⑥産業・生活観光地	資源配置、地域形成、交通施設、各観光対象施設の観光設備等についてマス化に対応する体制整備

また、「観光レクリエーションが国民の重要生活要求である以上、その開発整備は産業開発と同様国民生活向上の重要な条件である以上、その施設の充実や環境整備が公共事業として強化されるべきであり、国がこれを充分成りたさせるよう財政的な裏付けをすべき」、さらにそれが難しいのであれば観光地が利用者から金をとって環境維持や開発ができるようにすべき、と自主財源の必要性を指摘している。

「観光開発計画のビジョンと問題点<sup>13)</sup> (‘64)」はこれまでの観光計画論をさらに一步進めたものとして位置付けられる。「観光開発計画は単にサイトシーイングのため人を流すための計画というようなものではなく、人びとの生活行動圏の広がりや生活様式の発展に対応して日本の国土の中に生活とレクリエーションの空間のネットワークをどう形づくるかという問題」と捉え、観光計画と日常生活圏のレクリエーションとを「従来の考え方のように両者を切りはなすのはあやまり」とする。そのため、住宅とその庭(ペット、小動物、盆栽、庭)、近隣(緑道、児童・幼児遊び場、近隣公園)、都市圏(都市公園、遊園地、動植物園、運動場、郊外緑地)、都市圏外(観光地、休養地、自然公園)という4つのスケールの段階に対し、「有機的、総合的」な構成が必要だと主張するに至った。このうち観光地については高密度開発地区と低密度開発地区に分ける「コントラスト開発」の必要性(これを(f)とする)を提示している。これは‘60論文の(d)(e)を一步進めた主張と捉えられる。

以上から、戦災復興期は、景観面への意識はあったものの施設を中心に考え、観光資源の保護よりも開発的思考を持っていた西山だったが、戦災復興期から高度経済成長期に移行する中、国土スケールで観光資源の保存と開発を両立する計画論を提示するようになっていった。

#### 4 西山のレクリエーション観にみる観光の捉え方とそれに基づく国土計画論及び観光開発批判

なぜ西山が国土・地区スケールの計画の必要性を認識し、3章に述べた計画論を持ったのか。背後にある西山の観光レクリエーションに対する考え方を踏まえた上で明らかにする<sup>(12)</sup>。

##### 4.1 レクリエーション観に基づく観光を含む国土計画の必要性<sup>14)</sup>

西山は労働と余暇との関係を歴史的に振り返り、資本社会では「拘束労働から解放された余暇こそ人間の楽しみの時である」という意識が形成されるようになり、その「人間の楽し

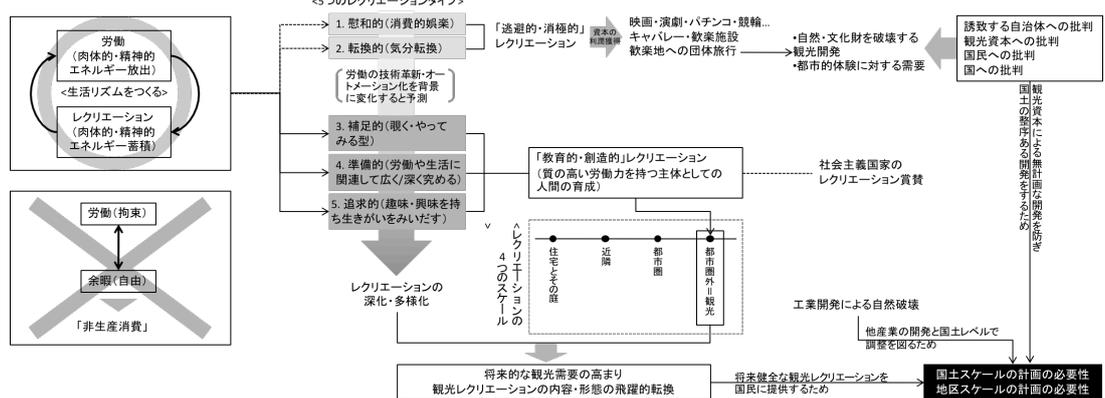


図1 西山のレクリエーションにみる観光の捉え方と計画の必要性の理由

み)は、「非生産的浪費」として認識されることを指摘した。しかし、西山は本来労働と余暇を使って行う「レクリエーション」は日々の生活リズムを作り出す要素であると主張していた。つまり、労働を「肉体的・精神的エネルギーの放出」、レクリエーションを「肉体的・精神的エネルギーの蓄積」とし、そういったレクリエーションこそ重要だと指摘する。レクリエーションは、「慰和的」「転換的」「補足的」「準備的」「追求的」の5段階に分けられるが、現在(‘60代)の日本では「非生産的浪費」、すなわち前2つの「逃避的・消極的」レクリエーションが盛んである。それは労働時間が長い現在、致し方ないことだが、そこに資本が入り込み、その類のレクリエーション(映画、キャバレー、歓楽施設、歓楽都市への旅行など)しか選択を与えない状況を作り出していることが問題であると批判する。しかし、産業のオートメーション化や技術開発により労働時間が短くなると、「補足的」「準備的」「追求的」といった教育的・創造的なレクリエーションの需要が増し、求められるレクリエーションの種類が多様になっていくと考えていた。観光はレクリエーションの中で、日常居住圏外において週・季リズムでなされるものと捉えており、将来のレクリエーションの質的・量的変化を見据えると、交通輸送形態とそれに伴う観光レクリエーションの地域構成の編成など、国土レベルの対応が求められる。つまり、将来のレクリエーション需要の変化を見据えた上での国土計画の必要性の指摘をしていた。レクリエーション需要の変化に対しては国土計画のみではなく、地区レベルのスケールの計画も必要だとし、3章の計画論に繋がる。

##### 4.2 当時の観光開発批判と国土計画の必要性

一方、西山は別の角度からも国土計画の必要性を主張していた。現在国民に「逃避的・消極的」レクリエーションを提供している資本は、それ自体が西山の考えるレクリエーションとしてふさわしい姿ではない上に、自然破壊の要因となっていると強く批判する。その背景には誘致する自治体、供給する民間資本、需要である国民、規制する立場の国という4方向に問題があると指摘する<sup>14)</sup>。自治体については観光が地域発展をもたらすという幻想のもと道路や旅館、展望台などを求め、さらに人を惹きつけようと遊園

地等の誘致を目指す。観光による経済発展については、自然の持つ価値を歪めて捉え、それを正当化する。こうした自治体の要望に答える形で資本家が「儲かる事業」「儲かる場所」に入り込み、開発を進める。その開発は自然破壊を起し、全国的に同じ開発がなされる結果、観光地の均一化、画一化へとつながる。土地所有者の私権が極度に強い日本では、自然破壊に対して自然公園法を始めとする国の法律は無力である。むしろ国立公園や国定公園といった指定は地域の宣伝に有力な看板を得たことになり却って民間資本を助長する。一方、国民は資本主義下では消費こそが享楽であるという考えに支配され、開発された観光施設での消費を求める。それは資本力の強化に貢献することとなり、資本による開発を推進する結果となる。

こうした状況に加え、工業開発などの産業開発もまた自然破壊を生むものであることを踏まえ、レクリエーションに関する適切な国土計画が必要だと考えていた。

以上をまとめると、西山がレクリエーションの国土計画の必要性を論じていた理由として、第1に将来健全な観光レクリエーションを国民に提供するため、第2に観光資本による無計画な開発を防ぎ国土の整序ある開発をするため、第3に他産業の開発と国土レベルで調整を図るため、という3点に集約できる。第一の理由は地区レベルの計画の必要性にもつながっている。

なお、国土計画に観光が位置づけられるのは'68の新全総であり、西山の構想とは約10年の開きがあった。

## 5 西山の観光論の相対的位置づけ

ここでは西山自身の専門性における観光論の位置付けと当時のその他の専門家との相対に見た西山の観光論の位置付け及び当時の観光政策との関係を分析する。

### 5.1 西山の専門性における観光論の位置付け

西山は「生活空間の構成を(略)専門としている私は、将来の生活の空間的構造がどうかかわっていくかという点でレクリエーションとか観光とかいわれている生活部分について、特別な興味をもって研究している<sup>12)</sup>」と述べており、観光を生活部分として捉えている。それは4章に述べたレクリエーションの延長としての観光という捉え方によく反映されている。また、観光地での生活について西山は次のような危惧をしている。「観光産業の経営者たちは(略)大多数の日本人の住宅改善よりもっと早いスピードで、もっと漸新・合理的、ロマンチックな施設を次々とつくり出していこう。 (略) 日常生活している自分の住居にはないユメの生活が1日でも2日でもできるとしたなら、人々はその生活を自分の家にとり入れて住宅の革命的レベルアップをやらうとするよりも、(略)ユメをみるという手法を選ぶだろう。そのことは人々の財布の中で、住宅改善に向けられるべき金を、レクリエーション地帯の開発・発展にすいあげてを意味し、それが一層住宅の改善や人間らしい生活、さらには本当のバランスのとれた国土の姿をつくり出すみちを邪魔だとする<sup>15)</sup>」。この発言から、西山は観

光空間と住宅とを対照的に捉えており、居住空間としての住宅改善の方が重要だと認識していたことや観光という経験を目的化しない姿勢が伺える。都市や農村の住宅、社宅、炭鉱住宅など様々な住居の平面研究を行っていた西山だが、観光地の住居、すなわちホテルや旅館は西山の興味関心を引くところではなかった。

### 5.2 鈴木忠義との相対に見る西山の観光論

鈴木忠義(以下、鈴木、'24)もまた'60年代に活躍し、その後の観光研究に大きな影響を与えた専門家である。「昭和20年代中頃から(略)観光・レクリエーション計画の研究を続け、新たな計画分野の確立に努めた<sup>16)</sup>」と評価される。しかし鈴木は観光に対するアプローチは西山と大きく異なる。人間および社会は常に喜びと楽しみを求めるべきとし、自己啓発や観賞などに加え、西山が批判していた無目的の目的といった逃避的・消極的レクリエーションも観光の重要な要素と捉えていた<sup>17)</sup>。また、観光とレクリエーションの関係性については、鈴木は、余暇のうち非日常圏で行われる行動を「広義の観光」と捉え、その一部を「肉体的、精神的なレクリエイト」であるレクリエーションと位置づけた。より狭義の観光については、レクリエーションと異なり「自己を発見し、変えてゆくきっかけ」を持つものと捉えた<sup>13)</sup>。つまり、西山はレクリエーションと観光とを日々の生活リズムを作るという目的は同一でありながら、それが行われる場所が異なるという意味でレクリエーションの延長に観光を捉えたのに対して鈴木は、レクリエーションと(狭義の)観光とは、その目的が異なる(日常圏を離れる行動という点は共通でその点において両者は並列的)と捉えた点が異なった。また、西山が国土スケールで観光を捉えようとしていたのに対し、鈴木は観光施設や観光道路を手がけるなど個々の地域の観光地づくりを積み上げようとしていた。こうした態様の違いは、観光を人々の目的として正面から捉えていた鈴木と観光そのものは目的ではなく日々の生活リズムを作る手段の1つとして捉えていた西山ということから説明されよう。やや先回りして述べると、'70年代以降は西山が観光から景観へと関心を移す一方、鈴木は国、日本観光協会と繋がりを強くして観光計画論の主流を築いていく。

## 6 構想計画に見る観光計画論の実践

### 6.1 構想計画に着目する理由

西山は'60代に「西山研究室」の名で「京都計画<sup>18)</sup>」「奈良計画<sup>19)</sup>」「古やまと計画<sup>20)</sup>」の3つの構想計画を自主的提案として策定し発表した。

構想計画は後述するように観光計画としての側面を多分に含むが、既往研究ではその側面は指摘されていない<sup>21)</sup>。

西山自身は京都計画について「この提案は、こういう内容が問題であるのではなく、構想計画のありかたを示した<sup>22)</sup>」、奈良計画について「もっと別の考え方がありうる<sup>19)</sup>」、古やまと計画について「とり急いでつくられたものである(略)最終的に完成した計画ではない(略)全く別の案が

つくられてもよいと考えている<sup>23)</sup>と述べており、内容そのものよりもむしろ計画を提示することによって市民が地域の将来を考える契機となることを期待していた。しかし、西山を筆頭に複数人が関わったこれらの計画が当時の西山の思想を反映した計画であることに変わりはなく、奈良計画については当時の記述から西山がある程度実現を目論んでいたこともうかがえる<sup>(14)</sup>。以上のことから、構想計画の内容を分析することには意義があると考えられる。

## 6.2 京都計画

**【京都計画の意図としての観光】**西山は京都計画には文化財都市における開発的保存の形と日本の国土にマッチした高密度居住形態の検討という2つのテーマがあったと述べる。後者については既往研究で「イエポリス」という中央軸に沿った積層住宅群がしばしば取り上げられ、西山の構想計画の特徴である「地獄絵」の例だと指摘されている<sup>24)</sup>。前者については自然や文化財を保存するために積層住宅群が計画された、と後者との関係性の中で論じられることはあった<sup>21)</sup>が、具体的な計画内容とその考え方については十分に論じられていない。

西山の遺した資料を見ると、積層住宅に関する多数のエスキスが残されており、力を入れて検討していたことが伺える。当時の新聞報道も模型写真を全面に掲載しながらイエポリスを紹介していた<sup>25)</sup>し、片方は「京都計画六四」は「イエポリス」とそれを構成する「積層住宅」の構想に集約される<sup>26)</sup>と述べるように、京都計画の中でそのイメージが与えるインパクトは大きい。

西山は京都計画において、一般的な日本の都市の課題と京都の都市の性格を踏まえたビジョンの必要性を述べている。一般的な日本の都市の課題として、国土が狭く人口が稠密という制約上、高密度化、コントラストある開発、交通の多元的ネットワーク化の必要性を挙げる。京都の性格としては、教育と文化、都市的レクリエーションの中心核を挙げ、「新しい京都(原文)」のビジョンを描くには、一般の大都市の問題のほか、とくに国民のレクリエーション活動の将来における発展と結びつけた検討が必要であると述べる。つまり、イエポリスは一般的な都市の課題の解決として提示されたものであり、京都という特性は、国民のレクリエーション活動をどう計画に反映させるか、という点に活かされていると考えられる。

実際、レクリエーションや観光に関しては緻密な現状分析や需要予測の計算がなされ、根拠ある計画を定めている<sup>(15)</sup>。また、木村重信との対談<sup>27)</sup>で木村に「京都計画はやはり京都を観光都市として、とらえられるわけですね」と尋ねられた際、西山は自身の持つ観光に対する考えを述べた上で「今の言葉では観光都市かもしれませんが」と答えていることから西山の意識として京都計画は観光計画の側面を有していたと言える。そこで、以下では、観光計画としての京都計画の特徴を捉えていく。

**【観光計画としての京都計画】**京都には'61に年間1,220万人の観光客が来訪しているが、所得増と生活様式の変化

等の観点から'80は'60の5倍である5,000万人で1日のピークは50万人と予測している。50万人の観光客の流入は文化財保護の問題だけでなく京都の交通システムと都市部に与える影響が大きいとし、大量観光需要に見合う観光ルートの検討を行っている。観光ルートは観光客それぞれの観光レクリエーション行動によって異なる。京都計画では「ダイジェスト型」「探究型」「ハイク・スポーツ型」を想定し、「ダイジェスト型」向けにモノレールによるマスタート、「探究型」向けに特殊な歴史資源をマスタートから隔離して計画保存し、これらを結んだ逍遙道(スペシャルルート)、「ハイク・スポーツ型」向けに右京にスポーツ施設地区、洛南にレクリエーション地区を設けるという空間的計画がなされている。京都の観光資源である寺社仏閣をその観光価値によって一般観光型文化財(1級/2級)・特殊探究型文化財(1級/2級)・観光文化財(3級)に分類してルートを構築しているほか、マス流動に対応するために新規の観光施設(原文)として文化施設や伝統産業施設が計画されている。

## 6.3 奈良計画

**【奈良計画の性格】**奈良計画では京都計画に比べより一層観光計画としての側面が強くなる。国土計画からみた奈良の特徴として、「数多くの歴史的遺産を所蔵する、国民および人類のための文化財都市・史蹟文化公園都市」であり、このような都市機能に従事する人口によって構成されるが、他の一半は阪神大都市圏への通勤者によって構成されるため、「部分的には住宅施設としての性格」を有するという。

**【観光計画としての奈良計画】**'62に奈良・斑鳩・飛鳥地区を含む平野部を訪れた観光客数は1,100万人(推計値)であった。過去の伸び率を元に20年後の観光客数は県全体で5,000万人、平野部で3,700万人、奈良地区で2,400万人と予測された。奈良市域では1日あたり最高40万人の観光客の流入と予測し計画が立案されている。計画にあたっては観光客のうち遠方から来る客は見物・探究型、近郊から来る客はスポーツ・ハイキング型が多いことを踏まえたことが記されている。

交通計画について、自動車を都市内には入れず市内道路に入る地点で市内専門のバスやタクシー、モノレールに乗り換えるようにする。そのため、都市間連絡道路、市内観光道路、市内サービス道路、歩行者専用道路の4種類を系統的に整備する。また、旧市街地では表通りを散策用・観光用とし、裏通りを生活のための広場と緑道を整備することが盛り込まれている。公園緑地系統については、観光客を適度に集中・分散させるために計画されている。社寺観光向けやハイキング向け、スポーツ向けなど、観光客の需要に合わせて配置されている。観光ルートについては、街中に点在する寺社を適当に組み込んで一つのコースにし、新しい観光対象とすることでマスレクリエーションに対応させることが計画されている。また、京都と同様に小グループでゆっくりと見て回るコースも計画されている。

## 6.4 古やまと計画

【古やまと計画の性格】西山は飛鳥を中心とする地域は文化財を独特の景観と共に包蔵する地域であるため、国土スケールでの観光流動構造に対応しつつ保存・整備を考えなければならないと述べる。史跡観光は歴史の流れを体験することが醍醐味であり、それが感じられるような歴史地域体系としての整備を目指した。

【観光計画としての古やまと計画】20年後の観光需要を1,100万人、1日あたり最大11万人の観光客を想定した計画が作成された。交通は当該地域がスピード観光に向かないという認識から歩くことを重視した交通体系が考えられている。域内交通はモノレールが計画されている。観光施設は4段階(S1: 休憩所、売店、便所 S2: 宿泊、食事、文化財展示施設、S3: 博物館、案内所、土産物店、その他文化施設、S4: 慰楽施設)の構成となっておりそれぞれの場所に相応しい施設整備が計画されている。明日香地区は地区内を歩行者とサービス用の自動車のみとし、岡、飛鳥集落はS2の整備を行う。特に史跡観光にふさわしい民宿が重視されている。今井町は観光客の利用の便のため、鉄道駅の整備、観光基地の整備(案内、休憩、パーキング)、車で来る観光客向けのパーキング後の歩行者ルート設定、橿原地区との循環バスルートの設定が計画されている。初瀬は参道沿いの修景・修復と自動車交通の排除が計画されている。橿原は地域への玄関口とし、地区内交通系統は観光バスや乗用車のルートを設定し、駅前や主要観光拠点に駐車場を設置する。域内では観光バスや乗用車を入れない計画になっている。施設は広域・京阪神都市圏内のレクリエーション需要を満たすべくレクリエーション公園や野外博物館公園、古代大和研究所、古墳研究公園が計画されている。また、既存市街地や駅、駐車場付近に観光関連の店舗や住宅、旅館を集中させる計画である。

### 6.5 西山の観光計画論と実際の計画

以上に見た3つの計画と3章に見た西山の観光計画論との関係を見ると、いずれの計画も施設設計レベルに十分踏み込むものではなく、また、京都、奈良など、1地域の計画であるため、国土スケールにまで及ぶものではないが、地区～都市レベルの理念がそれぞれの計画には反映されて

いる。3章に述べた(a)～(f)の観光計画論に合わせて見ると、表3の通りである。必ずしも全ての項目が各計画に反映されているわけではないが、それぞれの観光計画論との対応が確認できる。また、西山は言及していなかったが計画内で用いられた特徴として、観光客と住民の動線の区別(奈良)があったが、これは都市観光地としての視点と捉えられる。主に西山の理論は自然地域における観光開発による破壊を批判する立場から構築されたものだが、文化財観光地である京都や奈良等にも適用されていたと言える。それは、尾家が語るように、西山は観光資源を文化財か自然かという区分ではなく地域空間における観光行動因子と捉えていた<sup>2)</sup>こととも無関係ではないだろう。

以上から、3つの構想計画はそれまでに蓄積してきた西山の観光計画論を実際の観光地を対象に展開させたという側面を有する事例だったと言える。これは既存研究では指摘されていない西山の構想計画論の捉え方である。

いずれの計画も、その地域のレクリエーション地としての特性を国土スケールから広域スケールで概観し、どういう意義を持つのかという検討から始まる。その上で需要予測を行っている。その地域のレクリエーション地としての特性は1つに限られるものではなく、観光のみならず近郊需要に対しては都市レクリエーションとしての要素を組み込んだニーズを想定し、それぞれの需要に合わせて西山の理論に基づいた空間計画がなされているのが特徴であった。

住田は住宅計画について「西山の計画者の立場には、「供給者の論理」が貫徹している」とし、需要者の立場が欠けていると指摘している<sup>28)</sup>が、観光計画については需要者、すなわち観光客となる国民の立場を重視した。ただし、その国民も批判の対象であり、正確には「西山の考えるレクリエーションの理想的需要者」を考えた計画論であった。一方で供給者としての観光資本に対しては批判的であった。また、「観光客を受け入れる地域」を供給者と捉えるならば、構想計画は市民に将来の地域像を考える契機を与える意図があったという点においては意識をしていたものの、観光地としての住民の役割には言及していない。つまり、三村のちに理論提唱することとなる「ホスト・ゲスト」のうち、ホストに関する指摘は十分ではなかった。それは、60年代という時代背景にも因ると考えられる。歴史的街並み観光等の大規模開発に依らない観光が台頭してきたのは70年代以降であり、観光計画における「供給者の論理」は西山の次の世代で理論化されたと言える。

### 7 まとめ

戦災復興期の西山は、観光施設への関心が高く、建築家としての立場から観光を見ていた。世論の主張が外客向けの施設整備の必要性であっ

表3 西山の観光地計画論と構想計画の関係

	西山理論	京都計画 1964	奈良計画 1965	古やまと計画 1968	
観光地計画論	(a)	観光基地におけるマスの化に伴う大量輸送交通機関の整備や交通網の再編成	—(言及なし)	・自動車を都市内には入れず市内に入る時点でバスやタクシー、モノレールに乗り換える。	—(言及なし)
	(b)	観光地点におけるマスの流れと滞留時間を考慮した観光地における移動のための動線整備・施設整備	・ダイジェスト型向けのモノレールによるマスを構築。	・街中に点在する寺社を適当に組み込んで一つのコースにし、新しい観光対象とする。 ・公園緑地系統を観光客の需要に合わせて計画。 ・マス流動をさげられるよう駅前広場を設ける。	・野外博物館公園、古代大和研究所、古墳研究公園等の整備 ・モノレールを大量高速観光流動機関とする。
	(c)	スペシャル・レクリエーション確立	・「探研究型」向けに特殊な歴史資源をマスマルチから隔離して計画保存し、遊道を通す計画。	・小グループ向けのゆっくりと見て回るコースの計画。	—(言及なし)
	(d)	〈見る〉〈聞く〉という受動的レクリエーションから〈する〉レクリエーションへの変化によって生じる低開発地域利用の需要とそれを実現するための空間の効率的利用	・〈する〉観光として「ハイク・スポーツ型」の需要を見込み、右京にスポーツ施設地区、洛南にレクリエーション地区を設ける。 ・伝統産業観光地区において〈する〉観光が可能な施設を配置する。	・〈見る〉〈する〉の両方の需要を満たすための公園緑地系統の計画。 ・軸線上に施設を集中させることにより公園緑地を広くとる。 ・公園緑地内に〈する〉レクリエーションのための施設計画。	・〈見る〉〈する〉の両方の需要を満たす ・史跡観光だけでなく、大都市圏内家畜の体育的レクリエーションの場を提供する。 ・野外博物館公園や古代大和研究所、古墳研究公園などを整備し、〈見る〉だけでなく〈歴史の追体験〉を可能にする。
	(e)	マス観光に合わせた施設が集積したレクリエーション地域	・京都駅から五条の軸線上にアムューズメントセンターを置き、大量観光客をもてなす施設を集中させる。	・都市軸に駅や宿泊・休業施設・商店・伝統産業工房などを集約し、観光流動の中心とする。	・既存市街地や駅、駐車場付近に観光関連の店舗や住宅、旅館を集中させる。
	(f)	高密度開発地区と低密度開発地区のコントラスト開発	・保存地区と開発地区のコントラストを意識した計画。	・表通りを散策用・観光用、裏通りを生活の場のための広場と緑道を設ける。	
その他					

たのに対し、西山は日本人を意識し、施設間の統制的整備を指摘し、先見的だった。

'59 から国土計画スケールで観光を捉えるようになったが、それは高度経済成長を目前に社会構造や国土構造が大きく変わるとを予期していた為と考えられる。西山はその頃から労働と共に生活リズムを高めるものとしてのレクリエーションを強く主張し、そのうち日常居住圏外で行われるものを観光と捉え観光計画論を築くようになった。3つの構想計画は従来指摘されてきた積層住宅のみではなく、西山の観光計画論を計画として示す側面を有していた。

生活リズムを高めるものとしてレクリエーションの延長に観光を捉えることによって大きく次の3つの視点を生むと考えられる。現代の観光及び観光計画の捉え方と対比することでその特徴はより明確になる。第1に、国民のレクリエーションとして観光客が地域から得る利益をより意識することである。現代的な視点に立つと、その逆、特に経済利益が重視されがちだが、西山は消費する観光を強く否定していた。そのため、地域としてどのような国民にどのようなレクリエーションを提供するか、そのためにどのような地域作りが求められるかを考える必要性を提示した。つまり、需要側からのアプローチであり、それは三村の博士論文にも受け継がれていた<sup>(6)</sup>。第2に、第1の見方から導かれる計画論的視点である。まず、その地域が国民のレクリエーション地であるということはその価値を持つ地域、そういう需要を生み出せる地域であるという前提がある。その上で、観光流動への対処やニーズに合わせた観光ルートの構築というソフトな視点と土地利用や施設整備、交通マネジメント、景観規制などを組み合わせた地区レベルの総合的な計画技術が必要だという視点である。また、構想計画では、観光だけでなく近郊住民のためのレクリエーション地としての需要を満たす計画も検討されていたが、それはたとえ京都や奈良のような観光地であっても近郊住民のためのレクリエーション地としての役割があるということである。観光計画が狭義に観光客を対象としがちな現代と対比すると斬新である。第3に、行政関与の捉え方である。西山は、観光レクリエーションが国民の重要生活要求であり、その開発整備は産業開発と同様国民生活向上の重要な条件である以上、その施設の充実や環境整備が公共事業として強化されるべきという考えにまで昇華している。しかし、その後現在に至るまで、観光地の開発が民間主導でなされ、結果的に空間的統率のとれないままになっていることを踏まえると、西山の視点は示唆的である。観光を日常生活のレクリエーションの延長と捉えることで行政が観光地に積極的に関与する必要性を正当化できる可能性を秘めている。

【謝辞】本研究の一部には、公益財団法人日本交通公社の観光文化振興基金を活用した。また、本研究の遂行に当たっては「NPO 法人西山卯三記念 すまい・まちづくり文庫」に多大なる資料の提供をいただいた。感謝の意を記す。

#### 【補註】

(1)三村は1957年に進学した修士課程から西山研に所属している。ヒアリングによると、西山より観光・レクリエーションを専門にするよう指名されたという。1959年には京都新聞主催の懸賞論文「近畿大観光圏の青写真」で一等を獲得するなど、早くも観光研究で成果をあげていた。三村の書いた懸賞論文は「全体的な都市計画のなかで観光の問題を考え、さらに伝統と近代観光の融和をはかる(京都新聞1958.6.1朝刊7面)」ものだった。なお、この懸賞論文では三等に絹谷祐規が入選している。(2)例えば、参考文献21(3)中林は、西山の関心は1970年代には景観論に移ったと指摘している。(4)2015年10月に実施した。ヒアリングは西山卯三に関する事項のみならず三村氏の観光論についても伺った。(5)収集した論考(著作除く)は文献3)のp.201-220の業績一覧の、No.83,272(文献9),278,295,316(同10),322,323,332(同11),357,370,378(同13),379,385(同17),394(同12),396(同21),399(同18),401,403,408,411,424,429,435,437(同19),479,500,575,625,645と文献6),7),14),22),26)である。文献10,12,13)は西山卯三(1968)、「地域空間論(西山卯三著作集3)」にも収録されている論考であるが、それ以外にも西山は観光の計画論を論じており、それらを用いて研究を行っている。(6)西山卯三以外のメンバーのみによる論文は分析対象としない。(7)観光技術家協会については、西川亮・窪田亜矢・中島直人・西村幸夫(2015)、戦争復興期に活動した観光技術家協会に関する研究 都市計画論文集 50(3), pp.800-807に詳しい。(8)いずれもNPO法人西山卯三記念すまい・まちづくり文庫所蔵資料である。(9)具体的に「京都や奈良に鉄筋コンクリートの建物に瓦屋根をつけた建築」と例示する。(10)全日本観光連盟による伊豆半島観光開発計画(1953)では、「一、はじめに」で外貨獲得の意気込みが語られている。(11)NPO法人西山卯三記念すまい・まちづくり文庫所蔵資料より。(12)本章は1章に引用した中林の先行研究と重複があるが、計画論との関係性を踏まえた分析としている。(13)鈴木忠義著、観光・レクリエーション計画(土木工学体系30)図12及び図1.3(14)西山卯三、町づくりの思想 p.58によると、奈良市役所の改築調査員だった西山は委員会の答申としては24号バイパスと近鉄の新大宮駅に近い三条中学の跡地あたりとしたが、西山本人の希望としては、「奈良計画」の構想を実現していく一階梯として、朱雀大路の近辺にもっていくべきだと考えていたことが記述されている。(15)なお、NPO西山卯三文庫には、京都計画に掲載されていない、より詳細な数値的検討が行われていたことがうかがえるメモが残っている。具体的には、観光客数と観光客の予想ルートからモノレール乗客人員を推計し、モノレールに求められる1時間あたりの本数等である。(16)三村浩史の博士論文「地域空間のレクリエーション利用に関する研究」は、将来どのようなレクリエーション需要が発生し、それがどのような空間条件を必要としているかを論じたものである。また、三村は2009年に日本都市計画学会功績賞を受賞しているが、その理由の1つに「わが国で最も早く地域空間のもつレクリエーション機能に着目した調査研究を進め、学位論文としてまとめこの分野の嚆矢」となったことが評価されている。

#### 【参考文献】

1)鈴木忠義(1967)、「日本の開発における観光の課題」、地域開発11(38) pp.10-21 2)尾家建生(2009)、「観光資源と観光アトラクション」、大阪観光大学観光学部紀要9, pp.11-19 3)NPO法人西山記念文庫(2000)、「西山卯三とその時代」4)西山卯三(1942)、「大東亜聖地祝祭都市計画案覚書」、新建築 vol.19-1 5)西山卯三(1968)、「地域空間論(西山卯三著作集3)」, p.116, 勁草書房 6)西山卯三(1968)、「地域空間論(西山卯三著作集3)」, p.88, 勁草書房 7)西山卯三(1949)、「観光事業と建築家」、建築と社会, 30(11) 8)西山卯三(1953)、「観光施設」、観光48 9)海道清信(2000)、「国土計画・構想計画」, p.189, 『西山卯三とその時代』, NPO法人西山記念文庫 10)西山卯三・三村浩史(1959)、「国内観光客層の構造と流動」、日本建築学会論文報告集, 63(2) 11)西山卯三(1960)、「レクリエーションのための国土計画」、国際建築 Vol.27 No.2, pp.19-26 12)西山卯三(1961)、「国土計画と観光開発」、観光事業研究 vol.2 13)西山卯三(1964)、「観光開発計画のビジョンと問題点」、建設者 Vol.2 No.4, pp.26-31 14)西山卯三(1963)、「もう一つの自然破壊」、朝日ジャーナル 5(37)(236), pp.86-90 15)西山卯三(1963)、「温泉宿」、新住宅 18(188)(1) p.78 16)1984年度都市計画学会石川賞「観光・レクリエーション計画に関する一連の研究」受賞理由 17)鈴木忠義(1965)、「観光開発の意味と観光の原理」、観光8, pp.35-39 18)西山研究室(1964)、「京都計画」、新建築 39(4), p.183-222 19)西山研究室(1965)、「奈良計画」、新建築 40(10) 20)西山卯三(1967)、「古やまと計画」、近代建築 21(12), pp.39-54 21)山本善積(1994)、「西山卯三「構想計画」論の展開」、研究論叢 人文科学・社会科学 44(1), pp.25-44 22)西山卯三(1964)、「文化財都市の近代化とは」、朝日ジャーナル 6(32)(283) 23)西山卯三(1974)、「構想計画をこそ」、明日香村史下巻, pp.549-565 24)西山卯三・片方信也(1988)、「都市ビジョンの科学」、三省堂, p.55, 1988 25)1964年7月13日京都新聞 26)片方信也(2007)、「構想計画-空間の論理と予測」、『西山卯三の住宅・都市論』, p.240, 日本経済評論社 27)西山卯三・木村重信(1966)、「シリーズ対談・現代京都文化論、新しき京の町づくり」、淡交 20(2), (229), pp.40-47 28)住田昌二(2007)、「西山住宅学論考」、『西山卯三の住宅・都市論』, p.73, 日本経済評論社